

大網白里町 宮谷横穴群

——地方特定道路整備埋蔵文化財調査報告書——

平成14年3月

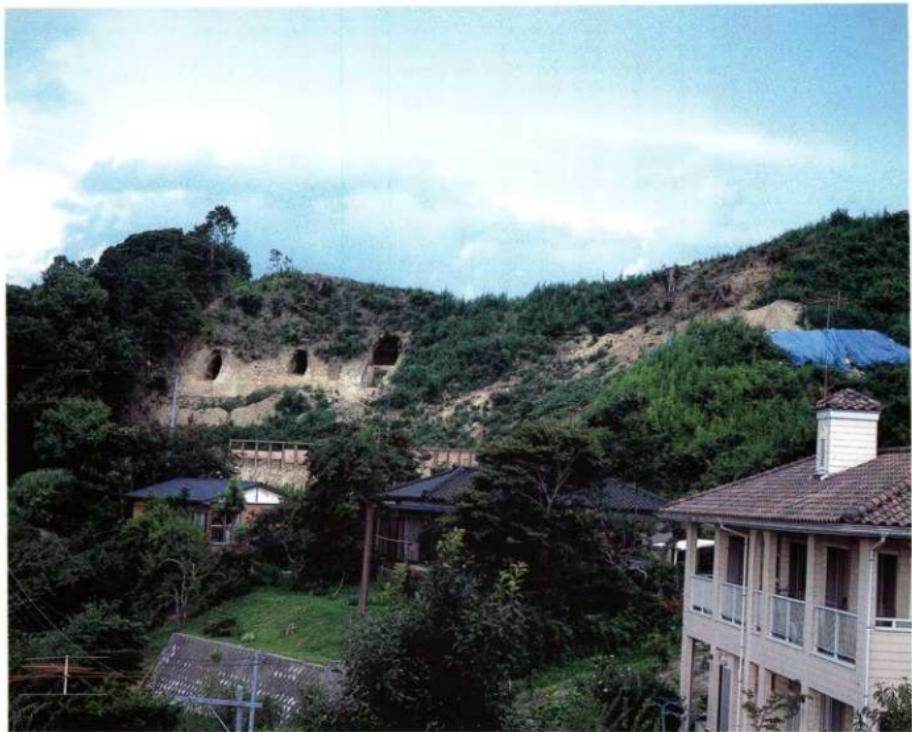
千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

おおあみしらさと
大網白里町 宮谷横穴群

——地方特定道路整備埋蔵文化財調査報告書——





遠景（南から）



ST003 遺物出土状況



ST004 美道と玄室

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第432集として、千葉県土木部の地方特定道路委託事業に伴って実施した山武郡大網白里町宮谷横穴群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代終末期の横穴の構造を明らかにすることができますなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

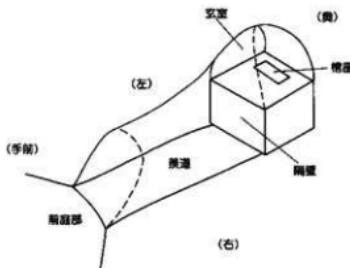
平成14年3月25日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 清水新次

凡　例

- 1 本書は、千葉県土木部による地方特定道路整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県山武郡大網白里町大網字西宮谷2989に所在する官谷横穴群（遺跡コード402-006）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、研究員 黒沢 崇が担当した。
- 6 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和47年撮影のものを使用した。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 大網白里町発行 1/2,500 都市計画図 (IX-LF 71-1・70-2)
 - 第2図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「東金」(NI-54-19-11-4)
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 本書に収録した遺物及び記録類は、当文化財センターで保管している。
- 10 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から多くの御指導、御協力を得た。記して感謝申し上げたい。（敬称略）

千葉県教育庁生涯学習部文化課、山武土木事務所、大網白里町教育委員会、財団法人山武都市文化財センター、池上 悟
- 11 横穴各部の名称は、右図のとおりである。現在この種の遺構について「横穴」または「横穴墓」という名称が混用されているが、研究初段階からこの種の遺構に対しては「横穴」という名称が使われていたという事実を重視し、今回は「横穴」という名称で統一した。
- 横穴の各部名称にも数種類があるが、この地域で最も汎用度が高く、統一された見解をもつ齊藤忠氏（1977『長柄横穴群』）が提示した方式を参考とした。また、横穴についての記載では、前部から玄室方向に対して左・右・奥・手前と呼称した。



横穴模式図

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第2章 遺構と遺物	6
第1節 全体の位置関係	6
第2節 横穴	7
1 ST001	7
2 ST002	12
3 ST003	15
4 ST004	16
第3節 丘陵頂部	21
第3章 まとめ	22
第1節 横穴と丘陵頂部	22
1 横穴の立地と構造	22
2 丘陵頂部	24
第2節 横穴群の年代観	26
1 出土遺物の検討	26
2 宮谷横穴群の位置づけ	28
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 宮谷横穴群周辺地形図	3	第10図 ST003	17
第2図 宮谷横穴群と周辺遺跡	5	第11図 ST004	19
第3図 調査区地形図	6	第12図 西側尾根	21
第4図 ST001	9	第13図 東側尾根	21
第5図 ST001出土遺物	11	第14図 各横穴の標高差	23
第6図 ST002出土遺物	12	第15図 宮谷横穴群と瑞穂29号横穴	23
第7図 ST002	13	第16図 丘陵尾根と横穴の配置	25
第8図 ST003出土遺物	15	第17図 出土遺物の類例	27
第9図 ST004出土遺物	16	第18図 横穴規格	27

表 目 次

第1表 横穴計測表	23
-----------	----

図版目次

巻頭図版 1 遠景・ST003・ST004

図版 1 宮谷横穴群周辺航空写真	図版 8 ST003
図版 2 遠景	図版 9 ST003
図版 3 遠景	図版10 ST004
図版 4 ST001	図版11 ST004
図版 5 ST001	図版12 西側尾根・東側尾根・近現代穴
図版 6 ST002	図版13 横穴出土遺物
図版 7 ST002・ST003	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

県道山田台大網白里線は、千葉東金道路山田インターと大網白里町の中心部を結ぶ幹線道路で、近年の交通量の増加と周辺の大規模宅地開発に伴い、道路の整備が急がれていた。千葉県土木部は、地方特定道路整備により県道山田台大網白里線の道路改良を計画し、事業に先立って埋蔵文化財の有無について千葉県教育委員会に照会を行った。これを受け千葉県教育委員会は、事業地内に横穴群がある旨を回答した。協議の結果、遺跡の現状保存が困難であるため、記録保存の措置を講ずることとなった。調査は、財団法人千葉県文化財センターが担当することになった。

平成12年度に発掘調査を行い、その結果、横穴4基の構造や丘陵頂部の地山整形の様相を明らかにすることができた。遺物は少量ではあるが、須恵器、土師器、両頭飾紙、鉄鎌、ガラス玉、耳環などが出土した。平成13年度から整理作業を開始し、今回報告書刊行の運びとなった。

発掘調査及び整理作業に係わる各年度の組織、担当職員及び作業内容は、下記のとおりである。

平成12年度	期 間	平成12年5月15日～平成12年7月31日
	組 織	東部調査事務所長 折原 繁 担当者 研究員 黒沢 崇
	内 容	発掘調査 横穴4基、丘陵頂部400m ²
平成13年度	期 間	平成13年11月1日～平成14年1月31日
	組 織	東部調査事務所長 折原 繁 担当者 研究員 黒沢 崇
	内 容	整理作業 水洗・注記から刊行まで

第2節 調査の方法と経過

本横穴群は、山武郡大網白里町大網字西宮谷2989に位置し、全体で7基の横穴から構成されている。今回は県道建設にかかる部分に対し、その中の4基と丘陵の頂部2か所(400m²)について発掘調査を行った。横穴の調査は、玄室と前庭部の中心を結ぶ線を主軸とし、半裁またはベルトを残し、土砂の堆積状況を確認しながら行った。玄室内に堆積した土はフリイにかけ、微細な遺物の収集につとめた。丘陵上の2か所の高まりに対しては、トレンチによる確認調査を行った。当初、丘陵下方の道路脇の穴を横穴と考えていたが、確認の結果、後世の穴と判明したので本調査は行わなかった。

調査に当たっては、横穴が急斜面に立地していて危険なため、土留め柵、通路、作業足場を業者に委託して設置した。調査時には、安全帽を着用を義務づけ、遺跡全体を見渡せる位置に監視員を配置した。また、遺構測量は、作業の効率化、安全性を図るために、多くの実績を有する専門の測量会社に委託した。

発掘調査は、平成12年5月15日に開始し、7月31日に終了した。以下、調査日誌に基づいて調査経過を記載した。

5月15日～5月19日 調査を開始し、調査区周辺の環境整備や表土除去を行い、調査前の写真撮影、東尾根のトレンチ確認調査を行う。

5月22日～5月26日 ST001～ST004の主軸を設定し、漢道部～前庭部を半裁し、段階的に土層観察図面作成・写真撮影を行う。西側尾根のトレンチ確認調査を行う。

5月29日～6月2日 引き続き、ST001～ST004の漢道部～前庭部半裁掘り下げを行う。ST001・ST002の玄室内に50cmメッシュを設定し、表土除去を行う。事業範囲内の斜面の表土を剥がし、新規の横穴の所在確認を行う。

6月5日～6月9日 引き続き、ST001～004の漢道～前庭部の半裁掘り下げを行う。図面作成・写真撮影を行う。ST001・ST002の玄室内調査を行い、堆積土を50cmメッシュ単位で、土壌につめ、フルイにかける。

6月12日～6月16日 雨のため16日のみ現場調査を行う。ST001・ST002の漢道部掘り下げ、ST003・ST004前庭部掘り下げを行う。ST003の前庭部から出土した須恵器大甕の出土状況写真撮影を行う。

6月19日～6月23日 ST001・ST002の漢道部掘り下げ、遺物取り上げを行う。ST003・ST004の玄室・漢道部奥50cmメッシュの設定、玄室～前庭部掘り下げを行う。ST003・ST004の玄室から漢道奥の堆積土を、50cmメッシュ単位で、土壌につめ、フルイにかける。

6月26日～6月30日 ST001・ST002の漢道部～前庭部掘り下げを行う。ST003・ST004の前庭部掘り下げ、遺物出土状況写真撮影・図面作成を行う。ST004の完掘・全景写真撮影を行う。28日から遺構測量（委託）をST004に対し開始する。

7月3日～7月7日 ST001・ST002の漢道部～前庭部掘り下げを行う。ST002・ST003を完掘し、写真撮影を行う。5日から遺構測量をST003に対し開始する。ST003とST004間のテラスの調査を行う。東側尾根全体の表土除去を行う。

7月10日～7月14日 ST001の漢道～前庭部掘り下げを行う。前庭部から溝が検出される。ST003・ST004玄室から漢道奥の堆積土をフルイにかける。13日から遺構測量をST002に対し開始する。西側尾根全体の表土除去を行う。

7月17日～7月21日 ST001の完掘、ST001～ST004の写真撮影を行う。21日から遺構測量をST001に対し開始する。空撮のための清掃を行う。

7月24日～7月28日 空撮、遺構測量を行う。

7月31日 現場施設を撤収し、調査を終了する。

第3節 遺跡の位置と環境（第1・2図）

宮谷横穴群は、金谷郷丘陵と呼ばれる丘陵群先端部の九十九里平野を望む標高50mの南側斜面に立地する。古くからその存在が知られ、記録¹⁾が残されている。この丘陵は、関東ローム層の堆積がみられず、笠森層を基盤とし、宮谷横穴群もこの層を掘り込んで構築されている。周辺は千葉県内でも横穴群が数多く分布する地域である。ここでは、周辺に横穴が造営された古墳時代後期～終末期に限定して概観しておく。遺跡の立地の傾向としては、丘陵先端に横穴群が多く分布し、内陸に入った台地平坦部に小規模の古墳群と集落の分布がみられる特徴がある。

横穴群としては、宮谷横穴群北東に、中谷横穴²⁾(1)～横穴1基、千段穴²⁾(2)～横穴1基、正大横穴群²⁾(3)～横穴10基、道塚横穴群²⁾(4)～横穴4基が分布する。道塚横穴群は平成5年に発掘調査が行われ、高壇



第1図 宮谷横穴群周辺地形図 ($S = 1/5,000$)

をもたない構造が明らかにされている。時期は、出土遺物から7世紀の前半に位置づけられ、当地域での横穴群では、現段階では初期のものに相当する。宮谷横穴群の北西に餅木横穴群⁴⁾(5) - 横穴26基があり、その内の20基について平成3年～6年に発掘調査が行われた。調査された横穴はすべて高壇式横穴であり、遺物は須恵器を中心に比較的豊富に出土した。時期は7世紀後半を中心とし、高壇式横穴の変遷を捉える上で多くの成果が得られている。宮谷横穴群の南には、北後谷横穴⁵⁾(6) - 横穴1基、本宿横穴群⁶⁾(7) - 横穴7基、駒込横穴群⁷⁾(8) - 横穴4基、瑞穂横穴群⁷⁾(9) - 横穴43基、永田横穴群⁸⁾(10) - 横穴3基、小中横穴⁸⁾(11) - 横穴4基が分布する。北後谷横穴は昭和62年に発掘調査が行われ、玄室の拡張の痕跡が明らかにされた。本宿横穴は、大網城の築造により、一部削平されてしまったと考えられる。確認できた7基も、玄室の一部が残存するにすぎない。瑞穂横穴群は、昭和59・60年に発掘調査が行われた。高壇式横穴と高壇のない横穴とが混在し、構造の変遷を考える上で重要な横穴群である。漢道入口に溝状の閉塞施設が検出されており、宮谷横穴群との類似性が挙げられる。

古墳群や集落としては、養安寺古墳群⁹⁾(12)、養安寺円墳群¹⁰⁾(13)で円墳がそれぞれ2基確認されている。猪ヶヶ崎遺跡¹⁰⁾(14)では古墳時代後期の竪穴住居跡16軒、終末期の竪穴住居跡29軒、一本松遺跡¹⁰⁾⁽¹⁵⁾(15)では、古墳時代後期の竪穴住居跡36軒、終末期の竪穴住居跡30軒が調査されている。小西平台遺跡¹⁰⁾(16)は方墳4基、前方後円墳1基、円墳3基、古墳時代後期住居跡の18軒、終末期竪穴住居跡6軒、升形遺跡¹⁰⁾(17)では円墳3基、古墳時代後期の竪穴住居跡7軒、終末期の竪穴住居跡8軒が調査されている。小西平台遺跡や升形遺跡のように、発掘調査により初めて存在の分かれる古墳が増加しており、從来からいわれる当地域における横穴と高塚古墳の数の不均衡は、概にいえるものではないと思われる。一方、調査は行われていないが、上田遺跡²⁾(18)、上向田遺跡²⁾(19)では、古墳時代後期の遺物の散布がみられる。

このように遺跡周辺は、近年の発掘調査の増加により良好な資料が蓄積されつつあり、本遺跡の成果を合わせ、古墳時代後期から終末期の墓制の変遷を考えることのできる地域といえる。

注 1 千葉県 1926 「大網町宮谷横穴」「史跡名勝天然記念物調査第2輯」

2 千葉県教育委員会 1998 「千葉県埋蔵文化財分布地図(2)・香取・海上・匝瑳・山武地区 (改訂版) -」

3 山口直人 1995 「道塚横穴・ヤグラ群」(鶴山武都市文化財センター)

4 小林信一・黒沢 崇 1999 「県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書2 -餅木横穴群-」(鶴山千葉県文化財センター)

5 小久賀隆史 1987 「山武郡大網白里町 北後谷横穴」(鶴山千葉県文化財センター)

6 杉山孝則 1989 「本宿横穴群確認調査報告書 -大網城跡測量調査報告書-」(鶴山武郡南部地区文化財センター)

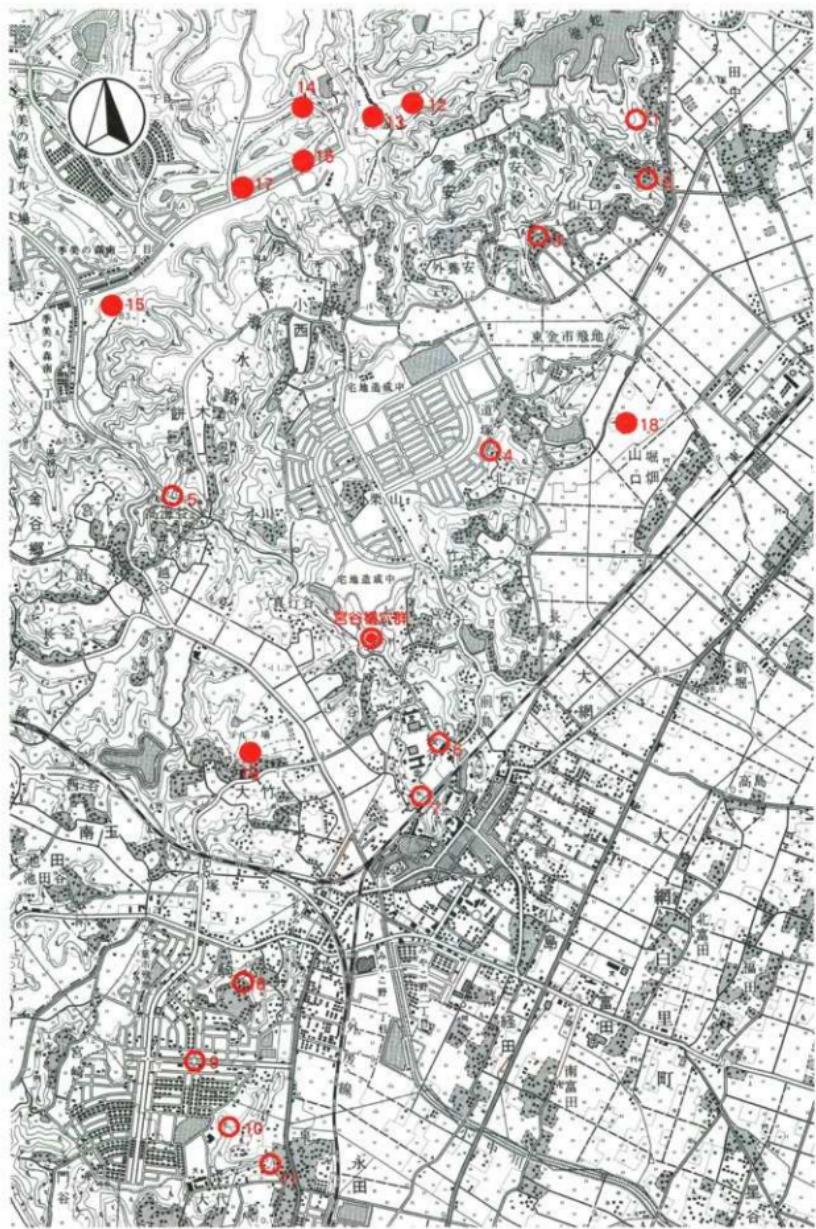
7 山口直人はか 1986 「瑞穂横穴群」(鶴山武郡南部地区文化財センター)

8 鶴山武都市文化財センター 1990 「永田横穴」「年報No7 - 平成2年度」

9 鶴山武都市南部地区文化財センター 1989 「小中横穴」「年報No4 - 昭和62年度」

10 鶴山武都市文化財センター 1995・1996・1997 「大網山田台遺跡群」II・III・IV

11 鳴田浩司・小林信一 1997 「県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書1 -大網白里町一本松遺跡・山田台No.6-2遺跡・東金市山田水呑遺跡・山田新田Ⅲ・山田新田所在馬土手-」(鶴山千葉県文化財センター)



第2図 宮谷横穴群と周辺遺跡 ($S = 1/25,000$)

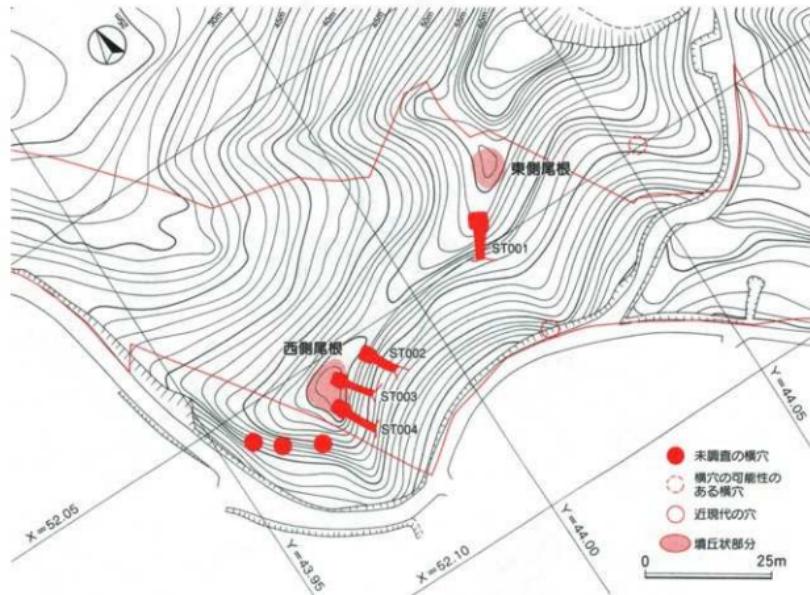
第2章 遺構と遺物

第1節 全体の位置関係（第3図）

本横穴群は計7基で構成され、東西に伸びる細長い丘陵の南側斜面の中腹に標高40m～50mの範囲で1列に並んで築造されている。調査を行った4基は、調査区東側から順に遺構番号をST001～ST004と付した。ST001のみが東に大きく離れて位置する。ST002～ST004の3基は隣接し、未調査の3基はその西側に並んで築造されている。ST001東側の事業地外に横穴の可能性のある窟みが存在するが、現状では断定できなかった。ST001南側の道路の脇にある穴は、当初横穴と考えられていたものである。草刈りを行い、内部の状態が明らかになった時点で新しい工具（ツルハシ）による整形痕のみが確認できた。加えて、プランは、不整形であり立地的にも横穴である可能性が低いため、後世の穴と判断した。

各横穴の間について、特にST002～ST004にかけては間隔が狭く、それぞれの前庭部を結ぶテラス状の通路が存在する可能性が考えられたため、それに斜面の傾斜に沿ったベルトを設定した。その結果、テラスは明確に確認できず、セクションにはやや水平に堆積する層がわずかにみられたが、面上に検出することができなかった。このことから、通路形成は基盤層まで掘り込みます、表土層を削った程度で構築したものであり、その後の土砂崩れで消失したものと考えられる。

調査区の丘陵頂部には調査区の東側と西側に墳丘状になっている部分があり、それぞれ東側尾根、西側尾根と呼称し、調査を行った。



第3図 調査区地形図 (S = 1/1,000)

第2節 横穴

1 ST001 (第4・5図、図版4・5)

土層堆積 調査当初から大きく開口しており、玄室天井の半分が崩落していた。羨道部から前庭部の天井は完全に崩落し、高壇がみえないほど土が堆積していた。土砂は、玄室部で約0.4m、羨道部最奥部で3.2m、前庭部で1.0mの堆積がみられた。ベルトを残し、断面観察を行いながら掘り進めていたところ、台風の影響でベルト上部が崩壊し、セクション図の一部については作成を行うことができなかった。

堆積土のほとんどが天井部分の崩落土を主体とするもので、しまりが非常に強い砂質土である。下層には炭化物粒子を少量含む土、中層にはしまりのやや弱い土が堆積していた。天井部崩落層も何層かに分層でき、数回にわたって天井を含む斜面の土砂崩れがおきたことがわかる。

玄室 奥幅3.8m、前幅3.7m、奥行3.2mの平面形がやや横長の長方形である。天井は高さ推定19mのドーム形であるが、上部は崩落していた。床面は平らで、掘り窪められた棺座はない。床面の一部に工具痕が確認でき、壁面と同様な工具で床面を平らに整形している。

壁面は、上部が剥落しているが、その部分以外には約12cm幅の工具整形痕が継に確認できた。下位30cmには、雑に細かな整形痕が残っていた。奥壁は摩滅して整形痕が明瞭に残っていない所が多く、後世の落書きが深く彫り込まれていた。奥壁の右上には細かい工具痕の密集する部分があり、深さは約4cmで横穴構築時のものかどうかはっきりしないが、恐らく後世のものであろう。

玄室床面上8cmの高さで、中央部を中心に、炭化物・焼土の集中を面的におさえることができた。ほぼ同一面で近世陶磁器が出土していたことから、その時期の2次利用の際の痕跡と考えられる。2次利用時の面から下に堆積する土に対して、50cm単位のグリッドを設定し、すべてフルイかけを行った。

隔壁 高さ1.8mで、玄室床面との角は摩滅して丸味を帯びていた。中央には、時期は不明であるが、足掛け用の掘り込みが3か所検出できた。他の部分の壁面と同様に、工具による整形痕が確認できるが、羨道部床面から上の20cm幅は工具痕が不明瞭であった。

羨道部 規模は奥幅2.8m、前幅1.6m、奥行6.4mで、奥の方が幅の広がる形状である。奥（隔壁）から3.0mの両壁面に、幅15cm～20cm、深さ15cm～20cmの縦にはしる溝状の閉塞施設が検出された。この部分の堆積土には特に、閉塞に関連するような堆積状態を確認することができなかった。

壁面には幅約12cmの工具による整形痕が確認でき、一部ではあるが、工具痕の切り合いから羨道部入口方向から玄室への方向性が確認できた。壁面は入口に向かうにつれ残存が悪く、工具痕も不明瞭であった。

前庭部 羨道部からほぼ直角に開く形で形成されていた。幅は、崖崩れまたは自然傾斜により、はっきりしないが、区画する幅広のものではなく、テラス状に通路として続いているあまり幅をもたない形態のものであったと考えられる。主軸と直行する向きで幅約40cmの溝を検出することができた。西側は浅く、東ほど深くなり、一番深い部分で40cmであった。丘陵斜面東側の低い部分に向かって深くなっていくことから、排水溝としての機能を有するものであろうと考えられる。掘り込みはしっかりとしており、覆土は炭化物粒子をわずかに含む土で、羨道部から前庭部に堆積した土に覆われていた。横穴と同時期に機能していたものと考えられるが、遺物は出土しなかった。幅も狭く、溝の覆土や床面に硬化面が確認できないことから、墓道とは考えにくい。

出土遺物 玄室から鉄器、コハク玉破片、不明銅器、メノウが数点出土した。玄室から羨道部にかけて、陶磁器が破片として多く出土した。いずれも破片であり、原位置を留めて出土したものはなかった。

1～6は鉄鎌破片である。完存するものではなく、鎌身部分が残るものは2点である。実測個体以外にも頭部・茎部小片が散点出土している。1・2は片刃箭式の鉄鎌鎌身部である。1が鎌身長2.15cm、鎌身幅0.8cm、重量5.88g、2が鎌身長1.9cm、鎌身幅0.8cm、重量3.93gである。3は鉄鎌頭部で、幅0.6cm、厚0.45cm、重量4.43gである。4・5は鉄鎌笠被部である。輪状突起幅は、4が0.8cm、5が1.0cmである。出土状況から1の鎌身部と同一個体であると考えられる。6は鉄鎌茎部で、現存長4.0cm、重量2.42gである。木質が付着している。

7～10は両頭飾鉢である。鉄鎌片も出土していることから弓と矢がセットで副葬されたことが窺える。木質はほとんど残存していない。本体端部を折り返し、弁を作り出しているが、鋸がひどく切り開き方は不明である。7は残存長3.6cm、径0.65cm、重量4.6gである。8は残存長3.7cm、径0.65cm、重量3.5gである。9は残存長3.75cm、径0.65cm、重量5.37gである。10は残存長2.8cm、径0.5cm、重量2.8gである。10は断面が角を有するため、両頭飾鉢ではない可能性がある。

11～13は鉄釘である。11は木質が良好に付着し、現存長3.25、重量2.52gである。12は現存長6.2cm、重量4.44gである。13は現存長6.2cm、重量6.39gである。

14～16は用途不明品である。14は大型の両頭飾鉢の形態をした鉄器である。現存長7.1cm、重量24.73gである。鋸がひどく、飾鉢のように遊動式であったかは、判然としない。15は環状の鉄器で、径3.5cm、重量7.27gである。16は管状の銅器である。現存長1.2cm、断面径0.45cm、重量0.44gである。

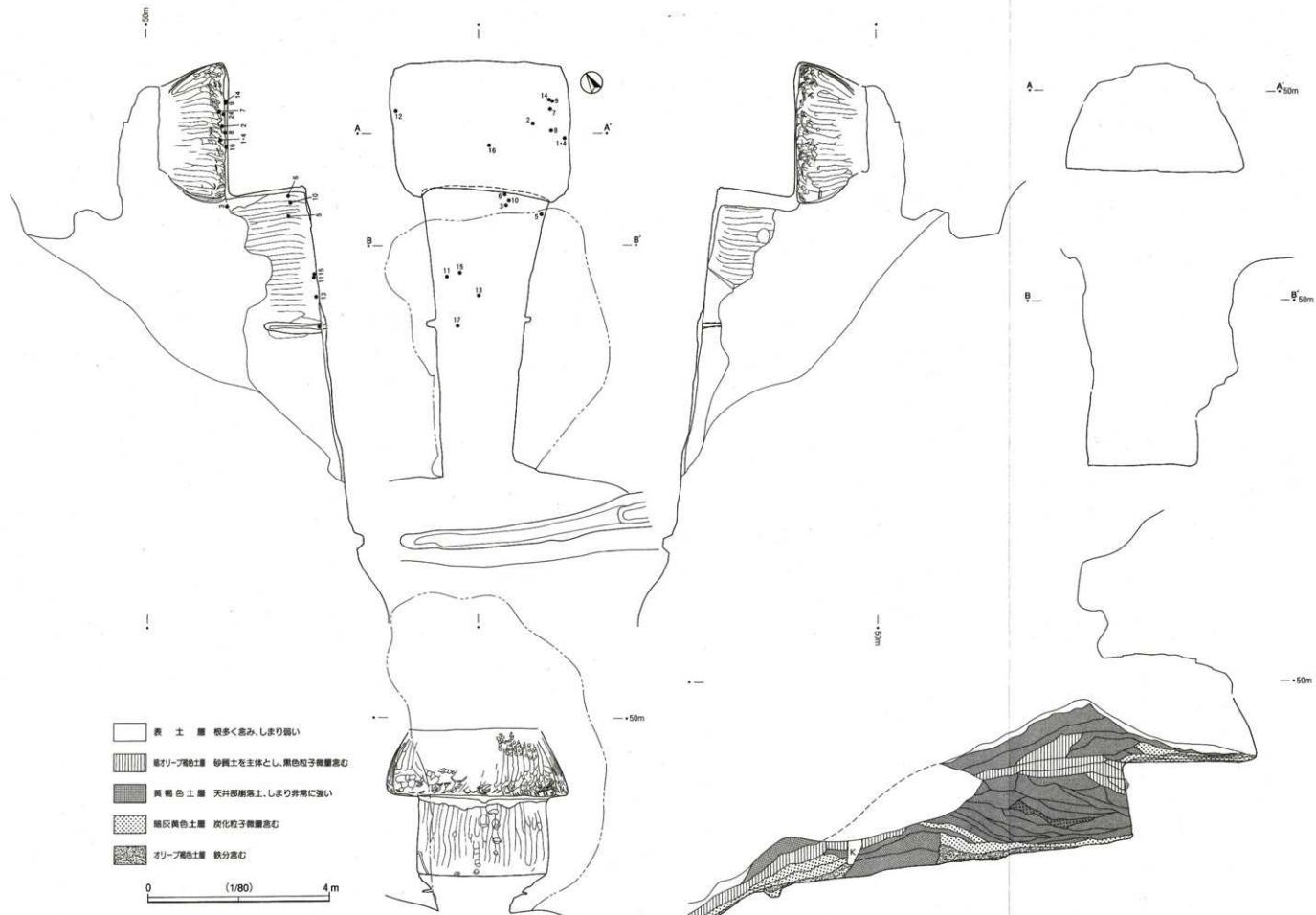
17はコハク玉である。破片になっていたものを接合した。片面穿孔で、長径0.85cm、短径0.7cm、最大長0.9cm、重量0.3gである。

18～29は近世の遺物であり、玄室覆土中層や羨道部覆土中層から上層にかけて出土した。

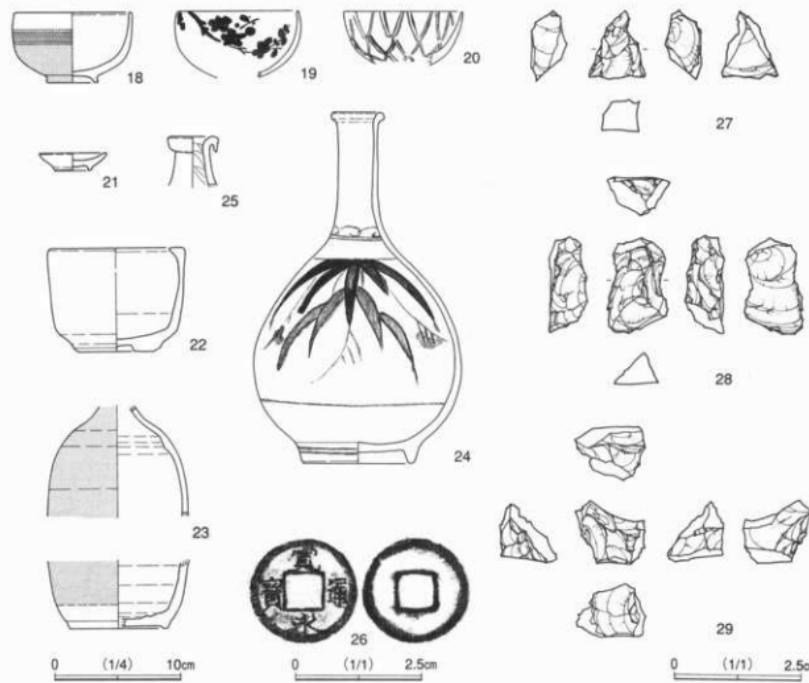
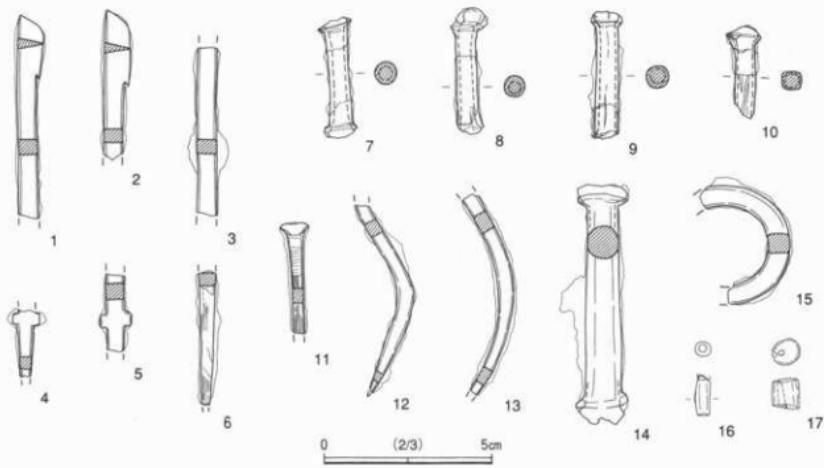
18～25は陶磁器である。時期は、18世紀～19世紀に比定できるものである。18は瀬戸系の陶器碗である。体部外面に4本の平行条線が巡り、その上下で釉を掛け分けている。内面には貫入がみられる。口径9.4cm、底径4.1cm、器高5.6cmである。19は京都系の色絵碗である。体部外面に赤・緑・青で草花文が施される。口径9.6cmである。20は肥前系の磁器碗である。体部外面に二重網目文を描いている染め付け丸形碗である。口径9.6cmである。21は肥前系の小皿である。全面施釉される。口径5.4cm、底径2.7cm、器高1.4cmである。22は肥前系の筒形香炉である。外面と口縁部内面に施釉される。口径10.8cm、底径6.0cm、器高8.2cmである。23は瀬戸系の徳利である。高台は低く、胴部下端は、釉薬の拭き取りが行われるがやや難である。最大胴部径11.2cm、底径7.9cmである。24は肥前系の徳利である。口縁がやや肥厚、外折し、胴部中位やや下に最大径をもつ。胴部に草花文を染め付けている。底部は摩滅している。口径3.9cm、底径8.8cm、器高25.8cm、最大胴部16.6cmである。25は瀬戸の徳利口縁部である。外面ともに灰釉が施される。

26は寛永通宝である。縁外径21.8mm、縁内径19.2mm、郭外径8.0mm、郭内径6.9mm、重量1.6gである。この他に古銭は、2点出土している。1点は、鉄錢で鋸がひどく、もう1点は小破片であるため拓本・計測は行うことはできなかった(図版13)。

27～29はメノウの破片である。周縁部に戴いた痕跡がみられ、火打ち石の破片である。陶磁器に伴う時期のものと考えられる。重量は、27が0.81g、28が1.53g、29が1.36gである。



第4図 ST001



第5図 ST001出土遺物

2 ST002 (第6・7図、図版6・7)

土層堆積 調査当初から大きく開口しており、玄室天井の半分が崩落していた。玄室には現代のものである一升瓶や靴が散乱していた。羨道部～前庭部は完全に埋まっていた。玄室部で0.4m、羨道部最奥部で2.8m、前庭部で0.8mの堆積がみられた。土層は表土を除いて、大きく4層に分けられる。羨道部下層には、炭化物粒子を少量含むやや黒みのある黄褐色土層が堆積し、その後、羨道部～玄室の天井部が崩落し、その上に比較的しまりの弱い黄褐色土層が堆積していた。羨道部の手前半分は傾斜し、しまりや粘性の強い暗オリーブ褐色土が堆積していた。

玄室 奥幅3.0m、前幅2.6m、奥行2.8m、天井高さ推定1.9mである。天井は、ドーム形である。棺座は、L字形に2か所配置される。床面に根があり込み、正確な床面を検出することが困難であった。そのため棺座の形状に関しては、一部推定の部分が存在する。玄室奥に位置する棺座の規模は、幅90cm・長さ184cm・深さ16cm、左に位置する棺座の規模は、幅72cm・長さ160cm・深さ15cmである。

壁面は上部を中心に剥落が多く、工具による整形痕（幅約12cm）が下部にやや不明瞭に確認できた。

玄室内堆積土は天井崩落土を除きフルイにかけたが、遺物は出土しなかった。

隔壁 壁 高さ2.0mである。玄室側に大きくオーバーハングしているが、本来は直立していたものと考えられる。玄室床面との角は、摩滅して丸味を帯びていた。

羨道部 規模は、奥幅1.7m、前幅1.4m、奥行5.8mである。中央から羨門に向かって傾斜する。壁面は奥のみ工具による整形痕が残り、閉塞施設の痕跡は検出できなかった。

前庭部 羨道部前端からほぼ直角に広がる形態である。

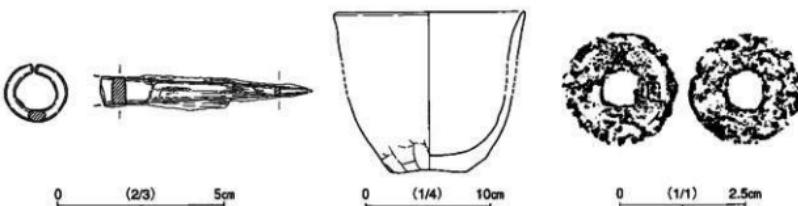
出土遺物 玄室からは出土せず、すべて羨道部からの出土である。羨道部奥で、床面から浮いたレベルで耳環・土器片が出土した。玄室にあったものが落ちたものと考えられる。羨門部にあたる部分の床面に近いレベルで、土師器壺底部が逆位で出土した。

1は銅製の耳環である。長径1.9cm、短径1.75cm、環断面長径0.5cm、環断面短径0.35cm、重量3.57gである。銹化が進行し、肉眼観察では鍍金などの処理の有無は判明しなかった。

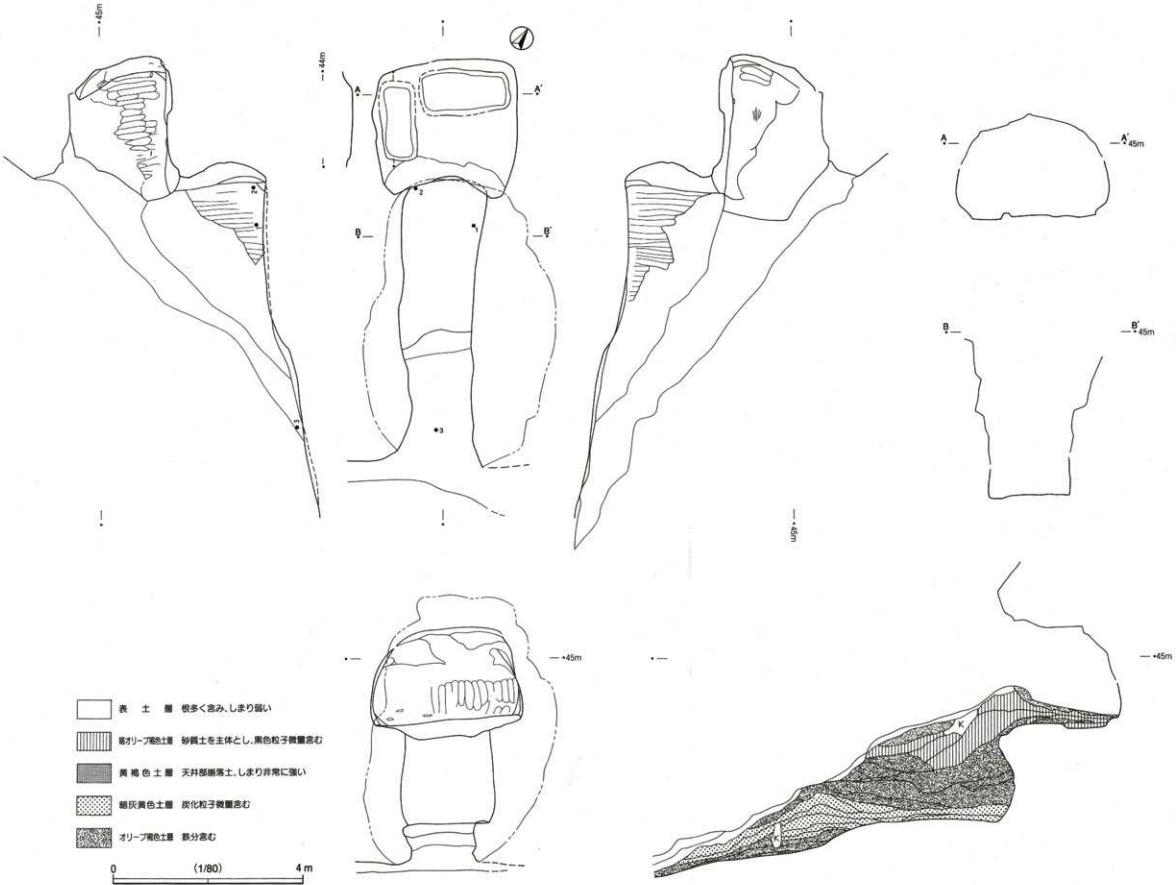
2は刀子の茎部分である。現存長6.1cm、重量6.67gである。木質が一部付着している。

3は土師器小型壺である。口縁は破片が小さく、角度は推定である。底径は、6.0cmである。外面は、粗いヘラケズリ、内面はナデ調整、全体的に表面は摩滅している。

4は寛永通宝である。縁外径23.2mm、内径18.1mm、郭外径7.9mm、内径7.0mm、重量1.85gである。



第6図 ST002出土遺物



第7図 ST002

3 ST003 (第8・9図、図版7~9)

土層堆積 調査前は、わずかに開口していた。羨道部の天井の残存が良く、玄室にはほとんど堆積はみられず、かすかに風化して落ちた天井部の砂質土のみであった。羨道部は、奥部分が0.2m、中央部分で1.3m、前庭部で0.5mの土砂の堆積があった。羨道部は、炭化物粒子を含む黒褐色土と天井崩落層が交互に堆積していた。前庭部には、最下層にしまり・粘性のあるオリーブ褐色土が堆積していた。

玄室 奥幅2.4m、前幅3.2m、奥行2.7m、中央部の掘込0.9mの平面四形である。天井は、高さ1.85mで、ドーム形である。棺座は、奥壁・両側壁に沿って3か所配置される。棺座の規模は、右棺座が長さ135cm・幅56cm・深さ12cm、中央棺座が長さ170cm、幅64cm、深さ12cm、左棺座が長さ150cm、幅56cm、深さ12cmである。中央に位置する棺座が一回り大きい。

天井にも整形痕が確認でき、頂部には倍の太さの工具痕が残されていた。家の天井の棟木を表現したものと考えられる。床面の四隅から天井中心に向かって稜線がはしるが、上部ほど不明瞭であった。天井前壁の角度変換線位置は、玄室床面前辺に一致する。工具による整形痕は幅8~10cmである。壁面下部の整形痕は雑な痕跡を残し、天井前壁の整形痕は周囲に比べ中央が短い痕跡を残していた。

隔壁 中心が抉り込まれた形態である。高さ1.8mである。現状では、丸味を帯びて工具痕も確認できないが、とろけるように風化したため、本来は角をもち、全面に整形されていたと考えられる。

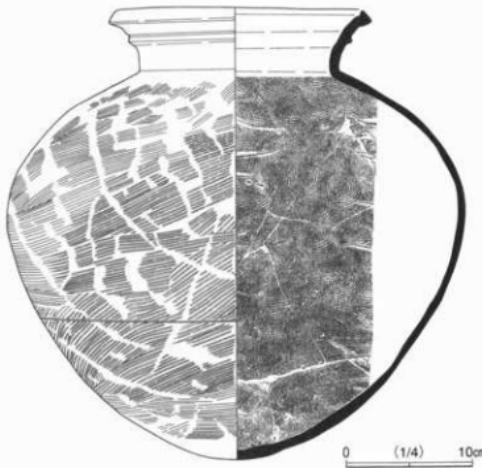
羨道部 規模は、奥幅1.4m、前幅1.2m、奥行6.4m、高さ1.85mである。奥(隔壁)から4.2mの両側面部部分に、幅15cm、深さ15cm、長さ144cmの縦方向の溝状閉塞施設が検出された。右側面にはその溝をはさんで、お玉杓子状の掘り込みが2か所みられた。丸い部分は深さ8cmと深く、溝状の閉塞施設に伴うものだろうか。側面及び天井には、縦方向に工具による整形痕(幅8cm)が明瞭に残されていた。線刻は、明らかに後世のものとみられる落書き(「山武農高」など)が確認できただけであった。

前庭部に近い部分のはば床面直上で、須恵器大甕が出土した。羨道部奥の土も玄室と同様にフルイかけを行ったが、遺物は出土しなかった。

前庭部 ハの字に開く形態である。

出土遺物 遺物は、羨道部から出土した須恵器大甕1点のみである。ほぼ完形であり、口縁をやや前庭部側の傾けて出土した。ほぼ原位置で、そのまま土砂崩れにより埋まったものと考えられる。底部の一部を除き、ほぼ完形に接合することができた。

口縁部下に断面三角の凸帯が巡る。底部は丸底で、器高36.0cm、口径19.7cm、最大胴部径36.7cmである。胴部内面に同心円の当て具痕、外面に叩き痕が全体にみられる。底部から3.5cmは外面の色調が変化しており、底部を土に埋めて立てていた痕跡の可能性がある。胎土、調整とともに精緻で、東海地方の所産であると考えられる。



第8図 ST003出土遺物

4 ST004 (第10・11図、国版10・11)

土層堆積 調査前は、わずかに開口していた。羨道部の天井の残りが良く、玄室・羨道部奥には、ほとんど土の堆積はみられなかった。羨道部手前の最も厚い所で1.6m、前庭部で0.7mの土砂の堆積がみられた。前庭部を中心に、しまりの強い黄褐色土・炭化物粒を少量含む暗褐色土が堆積し、その後、羨道部入口から内部にかけて、天井部の崩落がおきたことが確認された。

玄室 奥幅2.5m、前幅3.3m、奥行3.2m、中央部の掘込1.1mの平面凹形である。棺座は奥壁沿いや右寄りに1か所検出された。棺座の規模は、長さ176cm・幅80cm・深さ20cmで、他の横穴の棺座に比べしっかりととした掘り込みである。奥壁の下部1mは、黒色化がみられた。

天井は非常に残存が良く、ドーム形を呈し、高さは1.85mである。玄室壁面全体に、工具による（幅約10cm）整形痕が縦方向に施されている。床面に近い部分にはやや雑な整形痕が残されていた。天井頂部には、家の天井の棟木を模したと考えられる幅広の工具痕が確認できた。床面四隅から天井に向かっている稜線は明瞭である。稜線は専用の工具を使い分けたのではなく、壁面整形を行った工具の脇を角を立てるようにして削っていったものと考えられる。天井前壁の角度変換線は、玄室床面前辺と一致する。

隔壁 高さ1.6mである。中心が凹形に抉れており、各面とも整形が施され、工具痕が残されていた。一部に黒色化した部分がみられた。

羨道部 規模は、奥幅2.0m、前幅1.3m、奥行6.2m、高さ2.0mである。ほぼ直線的であるが、玄室近くで丸味をもちらながら外側に広がる。天井・側壁には、整形痕が明瞭に確認できた。天井頂部を境に右・左と縦方向に連続した工具痕（幅約10cm）がみられ、頂部には、付け足しで短い整形を行った単位がみられた。奥（隔壁）から4mの位置の側壁には、幅16cm・深さ20cm、高さ165cmの縦方向に溝状の閉塞施設が検出された。溝の奥面には幅7cmの直線的な工具痕が確認でき、刺突痕が5cm間隔でみられた。

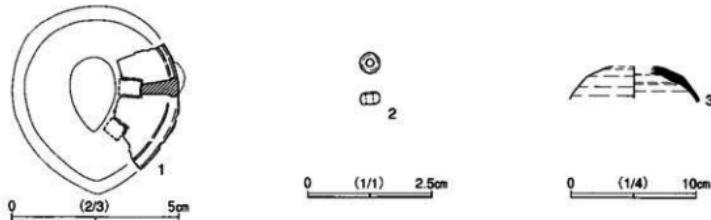
前庭部 主軸に対して直交しないが、地形に合わせ羨道部からほぼ180°に開く形態である。

出土遺物 玄室からガラス玉がフルイかけによって1点出土した。羨道部の閉塞施設付近の床面ほぼ直上から、須恵器杯とコハク玉・鉄刀部品が少量ながら破片で出土した。なお、コハク玉破片と鉄刀破片、刀身破片は、小片のため実測を行うことができなかった。

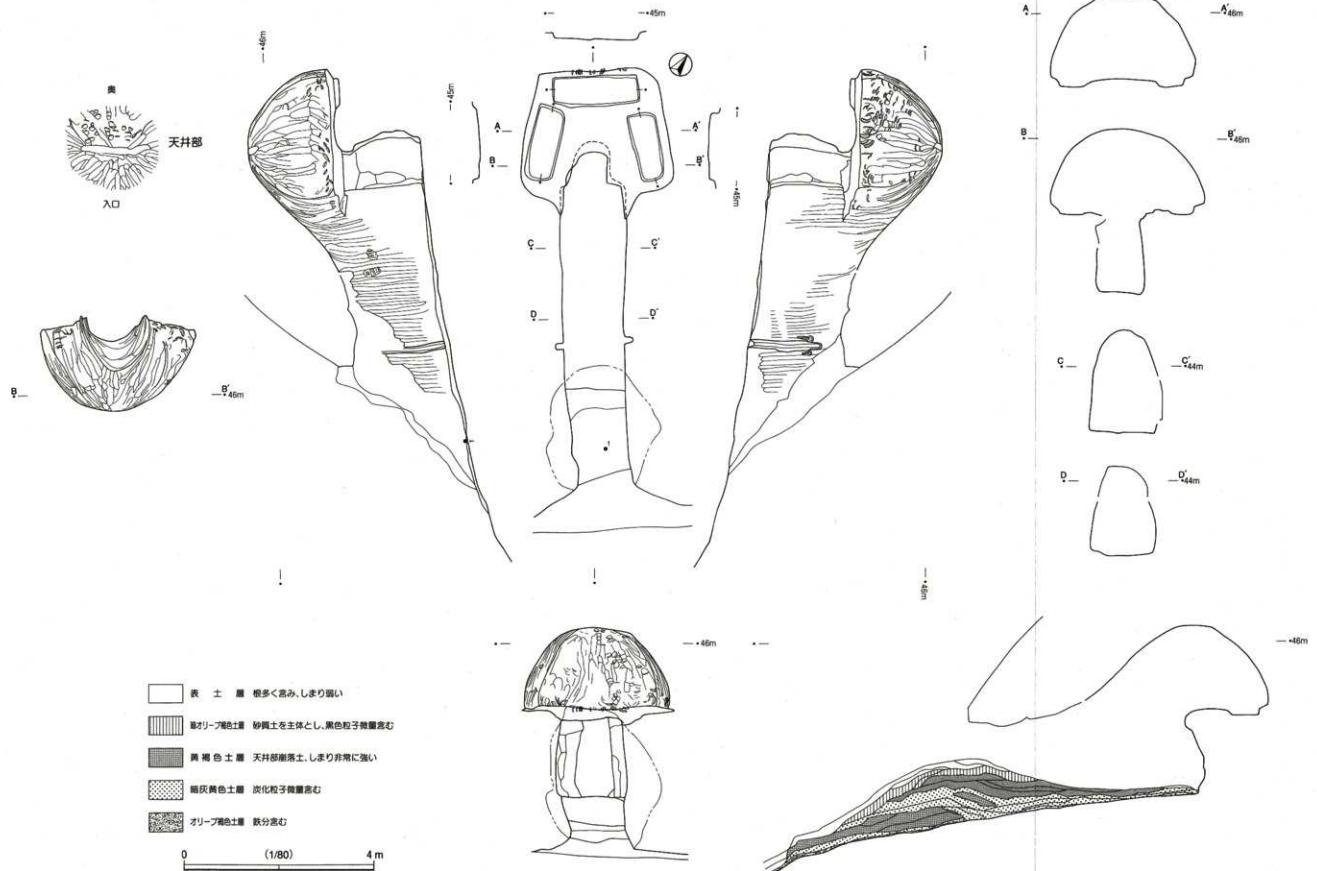
1は鉄刀鋒破片である。縁部がわずかに厚く、窓をもつ。角度から倒卵形を呈するものと考えられる。重量8.16gである。

2はガラス玉で、内部に細かな気泡がある。色調はブルー、径0.4cm、最大高0.25cm、口径0.15cm、重量0.06gである。

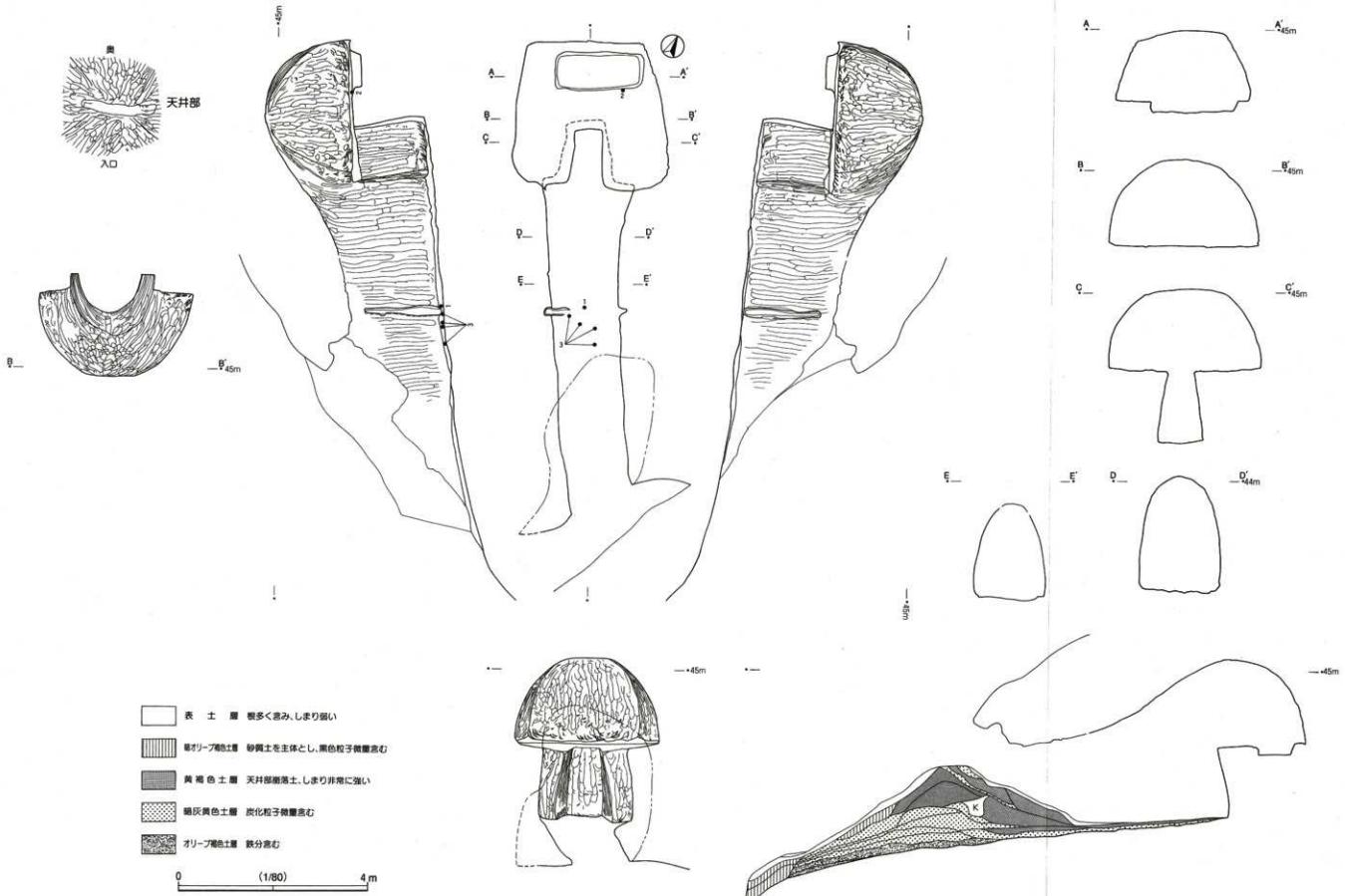
3は須恵器杯蓋である。同一個体の口縁も出土したが、小片で接点がなく接合できなかった。



第9図 ST004出土遺物



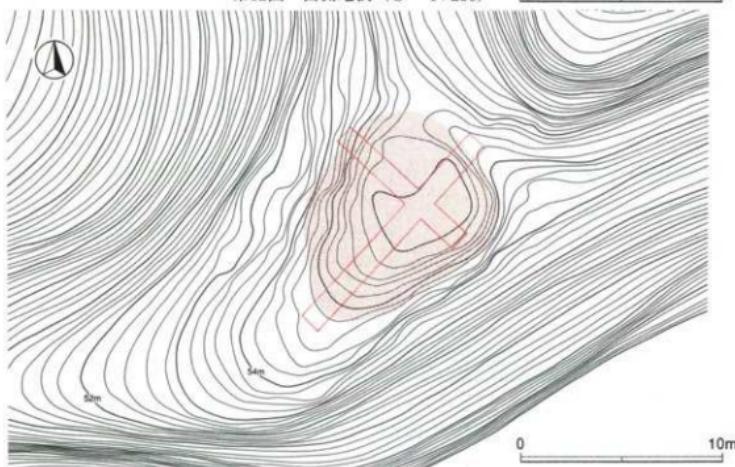
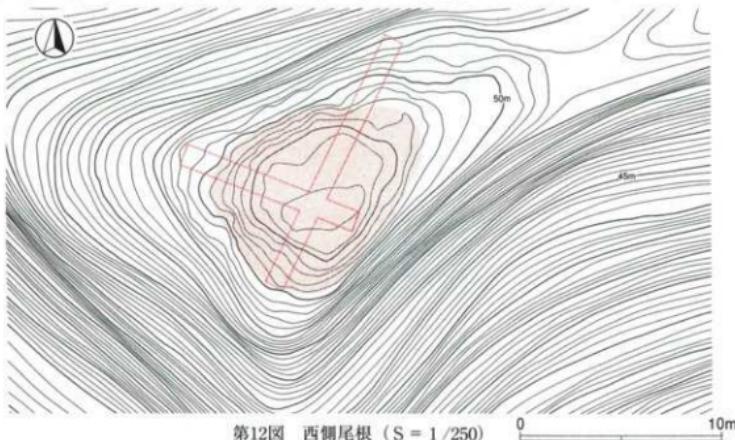
第10図 ST003



第11図 ST004

第2節 丘陵頂部（第12・13図、図版12）

丘陵頂部については、調査前から地形として、調査区東側と西側のみが高い点が不自然であると指摘されていた。それぞれの高い部分に直交する形でトレンチを設定し、確認調査を行った。表土（厚5cm）を除去した結果、すぐ地山になり、人為的な盛土は確認できず、遺物も出土しなかった。しかし、頂上にはフラットに広がる部分があり、周囲には自然傾斜ではなく、地山を削ったと考えられる部分が存在する。盛土ではなく、地山整形のみによって墳丘状構造を築造したものと考えられる。また、その部分の斜面には、横穴が集中して構築されているという点からみても、頂部に対し横穴造営 당시に何らかの意識が働いていた可能性が強いと考えられる。確認調査後、20cmセンターによる地形測量を実施した。調査期間最終段階に、周辺全体の表土除去を行い、遺物の回収を計ったが、遺物は出土しなかった。



第3章 まとめ

今回調査を行った横穴は、4基ともに玄室と羨道部の床面の段差が大きい、高壇式横穴であった。特に、ST003・ST004では、羨道部入口から玄室奥壁にかけて天井の残存が良好で、横穴築造当時の形態・各部の機能・天井形態の変遷を考える上で貴重な成果を挙げることができた。ここでは、調査によって明らかになったことをまとめ、周辺地域の成果を合わせて本横穴群の年代観を考えることにしたい。

第1節 横穴と丘陵頂部について

1 横穴の立地と構造（第14・15図、第2表）

立 地 横穴群は、東西にのびる細い丘陵の南側斜面に7基とも1列に並んで築造されている。調査を行った4基の詳細な標高差は、第14図のとおりである。離れて位置するST001だけが一段高く築造されているのを除き、ほぼ同一レベルで並んでいる。未調査の3基もST002～ST004に統一され、あまり標高差はないものと思われる。ST001は、規模が他の横穴に比べ玄室が大きい点も合わせ、他の横穴と時期差を想定することができる。

玄室床面はすべて水平を保つのに対し、羨道部～前庭部には傾斜がみられ、意図的に設計されている。主軸は基本的に斜面に規制されるが、東西尾根中心に向かってそれぞれ玄室が造られている。

規 模 玄室の平面形態は、□形と凹形の2種類に分かれる。それぞれの規模を比較したものが第1表である。玄室平面□形のST001・ST002では、ST001の玄室が一回り大きい。規格で違う点は、羨道部奥幅が前幅に対し、ST001では幅広になっている点である。玄室平面凹形のST003・ST004では、ほぼ同規模・同規格である。あまり時間差を考えなくてもよいと思われる。違いを強いて挙げるならば、□形と同様に、羨道部奥幅にやや差がみられる点である。

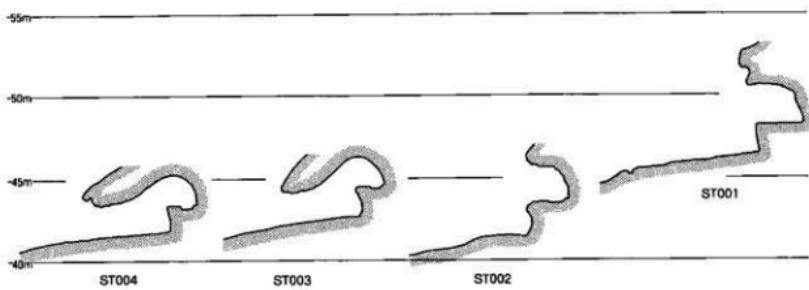
玄室天井 玄室天井形態はすべてドーム形で、羨道部壁面と同様に整形した工具痕がみられる。ST003・ST004の玄室天井の頂部には、家の棟木を模して幅広にした工具痕がみられた。このことは、天井形態が家形からドーム形への変遷したことを示す貴重な資料であるといえる。

天井高さは、玄室平面規模に合わせることなくほぼ同じである。平面的には規模差を意識して築造するが、立面に関しては工程上（作業上）の制約を受け、天井高には反映されなかったと考えられる。

ST003・ST004の天井前壁の整形痕は、周辺に比べ中央が連続しない短い痕跡を残している。平面凹形の玄室床面の成形（隔壁の抉り込み）が先に行われていたため、作業上の制約を受けたものであろう。

棺 座 棺座の数は、ST001ではなく、ST002が2か所、ST003が3か所、ST004が1か所とすべて異なって検出された。今回の調査では、棺座の数と横穴形態には関連が認められない。ST003とST004はほぼ同規格に構築されているにも関わらず、棺座の数に違いがみられることは、棺座の有無は時期差を示すものではなく、単に埋葬予定に合わせたものと解釈できる。棺座がないST001にも埋葬が行われたことは副葬品の出土からも明らかであるが、棺座の有無が埋葬様式の相違を示す可能性がある。ST001のみ他の横穴と離れて位置し、玄室規模が大きいことも関係してくるのであろう。

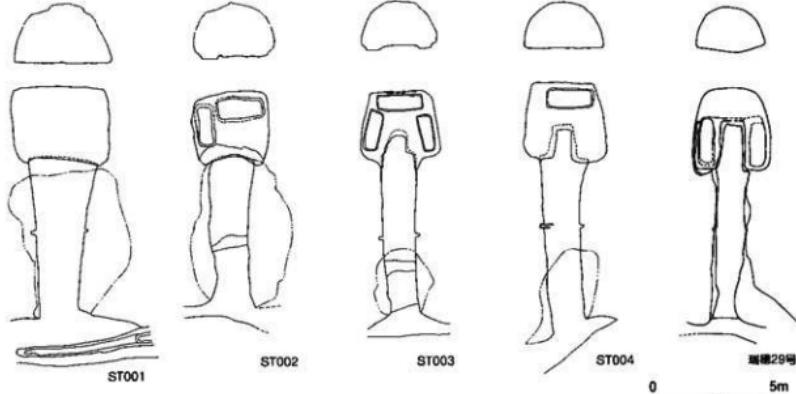
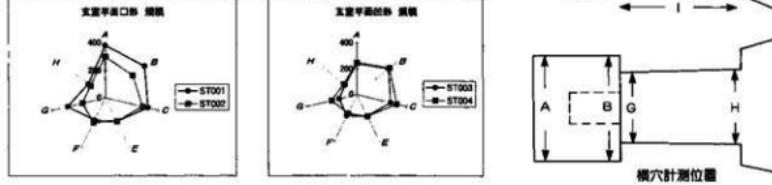
壁 面 各横穴壁面には、整形した際の工具痕（幅約12cm）が明瞭に天井から床面方向に残っていた。一部ではあるが、整形工具痕の切り合いの観察により、羨道部から玄室方向に工具の動きが認められる部



第14図 各横穴の標高差 ($S = 1/300$)

第1表 横穴規模 計測表 (cm・m³)

番号	玄室				横穴				奥部				
	平面形	高さ	幅	高さ	横幅	高さ	幅	高さ	平面形	高さ	幅	高さ	
ST001	□	360	170	320	/	190	11.40	△	180	230	160	400	/ 180° 逆K
ST002	□	300	240	290	/	190	7.30	△	200	170	140	380	/ 180° 逆K
ST003	□	240	220	270	90	185	7.22	△	180	140	120	340	/ 180° 逆K
ST004	□	250	230	320	110	185	8.86	△	180	200	120	320	180° 逆K



第15図 宮谷横穴群と瑞穂29号横穴 ($S = 1/200$)

分が確認できた。横穴の壁面整形が羨道部の入口から玄室へと仕上げていった工程の想定が可能である。ST001・ST003・ST004の羨道部壁面で、縦方向に幅15cm、深さ20cmの溝状にはぞ穴が掘られている部分が検出できた。板を横にはめ込んで、横穴を閉塞するための施設であると考えられる。残りの良好なST004では溝奥面に刺突痕が確認でき、整形を行った工具とは別の、幅が狭く先端が平らな工具を使用していたことが考えられる。

閉塞施設の位置は、平面上では羨道部ほぼ中央の側壁に掘り込まれている。しかし、立面を考えると、斜面の傾斜による羨道部天井が始まる部分に相当する。羨道部天井は、羨道部床面上部全体にあるとは限らないのである。この地域の特徴として羨道部の長さが指摘されているが¹¹、正確には、羨道部床面の長さが大きいとすべきであろう。この点は、丘陵斜面を垂直に切り落とし羨門部を形成する一宮川流域の横穴との系譜の違い、または時期差を示すものとして注意しておきたい。

同様の閉塞施設を検出した例として、大網白里町瑞穂横穴群29号¹¹が挙げられる。瑞穂29号（第15図）は、玄室平面凹形、天井形ドーム状の形態である。閉塞施設の位置だけでなく、他の部位の規模・規格ともST004と酷似する。これは築造の同時期を示すだけではなく、築造に関わった集団の同一性をも想定できる資料ではないだろうか。

ST002に閉塞施設が確認できなかったのは、羨道部壁面の残存が悪く消失したわけではなく、もともと存在しなかったと判断している。

壁面には、横穴が開口していたため明らかに後世の落書きである漢字・絵などが認められるのみで横穴造営当時の線刻を確認することはできなかった。

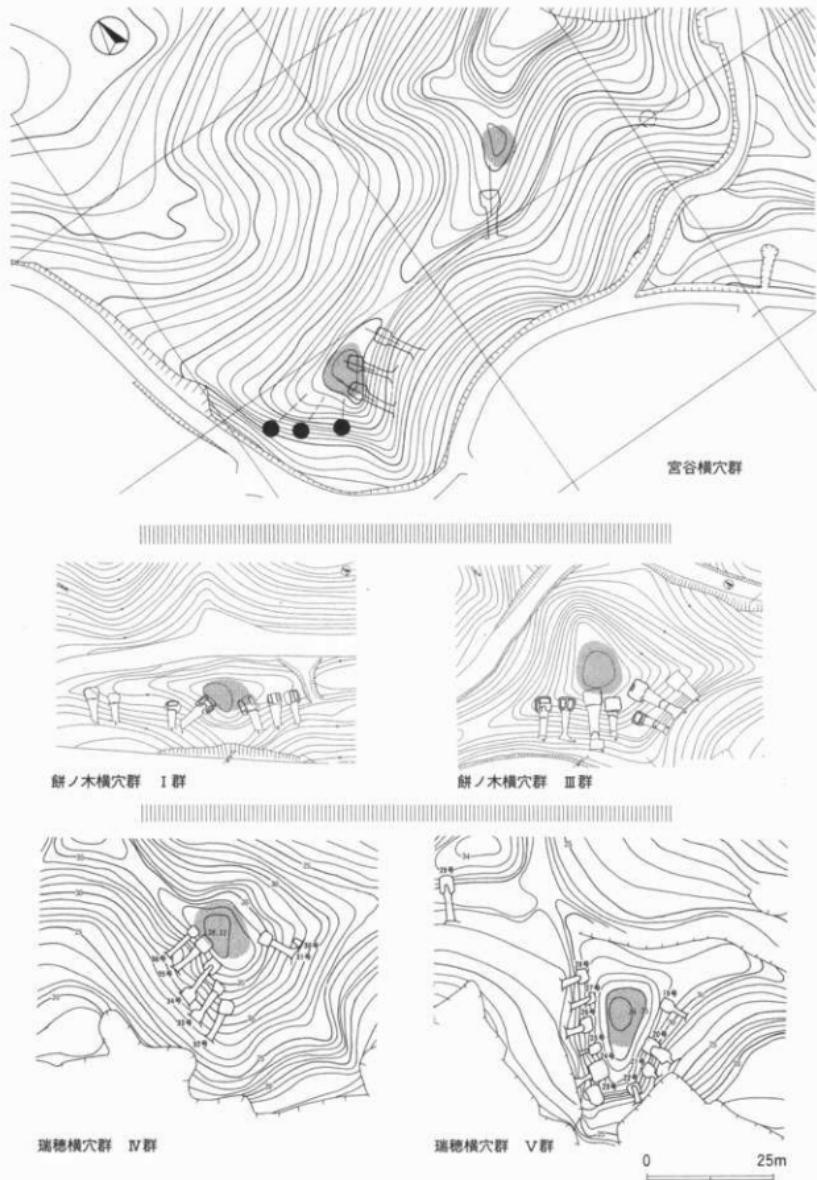
前庭部 前庭部は、ST003を除き180°に聞く形態である。ST003はハの字に聞く形態であるが、かなり大きく聞くため、あまり特殊性をもつものではない。前庭部は空間的には、あまり広くなく、機能も、各横穴をつなぐ通路を兼用していたと思われる。前述したような羨道部天井の関係とST003の須恵器大甕出土状況を考えると、羨道部閉塞施設の手前から前庭部にかけての空間に明確な機能差は感じられない。

2 丘陵頂部（第16図）

丘陵の調査は、東西尾根のそれぞれの中心の十字のトレンチを入れて行った。表土層は、全体に5cmほどの厚さで確認され、表土層直下は、しまりの強い地山層となり、人為的な盛土が施されていないことを確認することができた。しかし、人為的に削られている部分が確認でき、頂部にはフラットな面が存在するため、意図的に丘陵を改變している可能性が挙げられる。

西側尾根の南東斜面にはST002-ST003-ST004が造営されており、横穴は主軸が西側尾根頂部に向かって構築されている。特に、ST003に関しては、玄室の位置が西側尾根頂部直下に位置し、横穴式石室と同様な意識を捉えることが可能ではないだろうか。東側尾根の北東側は明瞭に区画されているが、現代の道のための掘込みである。道の時期は、どこまで古くさかのばるか遺物が出土しなかつたため不明であるが、横穴築造時期の掘込みを後世に利用したとも考えられる。南東斜面には主軸が東側尾根中心に向かうST001が築造され、こちらの尾根に関しては丘陵頂部に対する意識を感じられる。

墳丘を有する横穴については、従来は、九州を中心とする地域での特異性と考えられていた。近年では、長南町の米溝横穴群¹²、福島県の弘法山古墳群¹³において、東日本でも確実に人為的な盛土による墳丘をもつ横穴の解明が行われている。池上悟氏¹⁴は、千葉県内では、米溝横穴群以外にも墳丘を伴う横穴として、市原市大和田横穴群、富津市向原横穴群が可能性をもつものとしている。本横穴周辺の横穴群を再検



第16図 丘陵尾根と横穴の配置 ($S = 1/1,000$)

討してみると、餅木横穴群¹⁾のI群・Ⅲ群、瑞穂横穴群のIV群・V群が、本横穴群と同様なあり方をするものと考えられる。(第16図)

このような現状から、今回の丘陵頂部については横穴に関連する施設の一部として評価すべきと考える。横穴という墓制は、丘陵斜面の埋葬施設本体のみに限るものではなく、丘陵全体に対して関わるものであるということができる。墳丘を有する横穴の理解は高塚古墳における墳丘の意義と同様と考えられ、今後の横穴調査において丘陵頂部を合わせた精査が行われることを期待したい。しかし、横穴の被葬者像が未だに特定することができない現段階において、墳形に規制をもつと考えられる政治的構築物である高塚古墳と墳丘を有する横穴を同列に扱うことは、慎重に行わなければならないことも事実である。

第2節 横穴群の年代観

横穴からの遺物には、ST003から出土したほぼ完形の大型須恵器壺がある。その他の横穴からは、横穴が調査時には既に開口していたため、須恵器・土師器・耳環・鉄器・ガラス玉などが少数出土したにすぎない。まず、年代の想定可能な遺物（鉄器・土器）について検討し、その後、周辺の横穴群についての研究成果に照らしながら本横穴の年代の位置づけを行を行う。

1 出土遺物の検討（第17図）

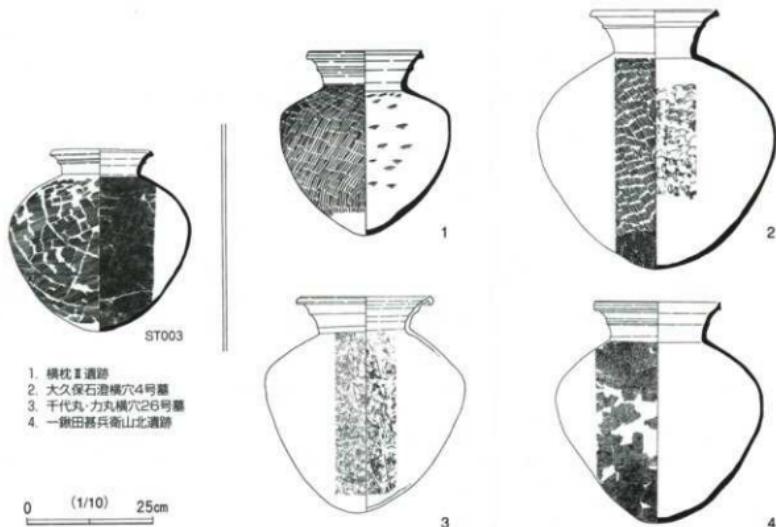
鉄 器 両頭飾鉄・鉄鎌・鉄刀部品・刀子・釘・用途不明鉄器の破片が出土したが、どれも遺存状況・出土状況ともに良好ではない。年代を想定できる遺物としては鉄鎌のみが挙げられる。鎌身形を残すものは2点あり、いずれも片刃である。鎌被部も2点で、いずれも棘状突起を有する。接合しないが同一個体と考えられる。全体を合わせて考えると、型式は棘被被楊抜片刃箭式長頭鎌である。鎌身長は2cm前後と短く、間は鋸角であるが小さいものである。これはTK217型式期以降にみられる特徴⁴⁾といえる。

土 器 土師器壺、須恵器杯蓋・大甕が出土している。土師器壺底部は、ST002の前庭部に倒立した状態で破片で出土した。器形がはっきりせず、年代は不明である。

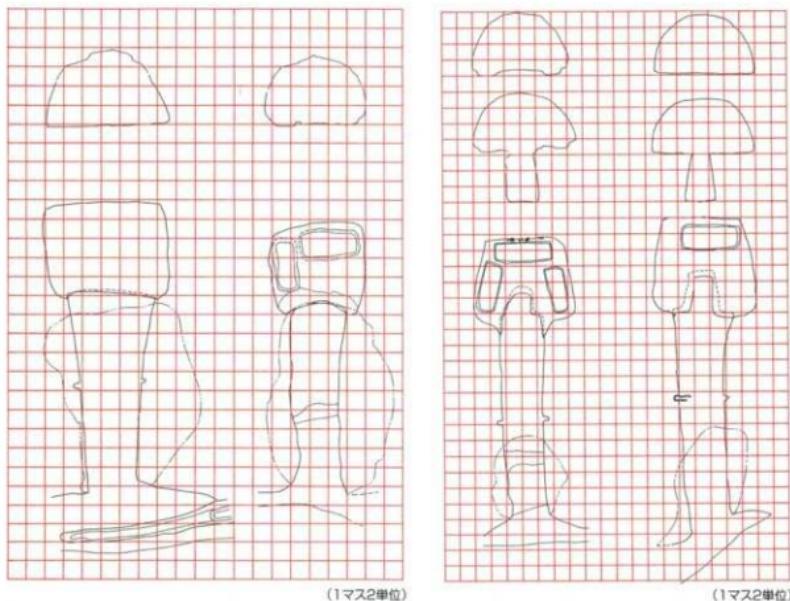
須恵器に関しては⁵⁾、胎土・焼成・調整などの特徴から湖西差のものと考えてよいようである。杯蓋は、ST004羨道部閉塞施設付近からコハク玉細片とともに、細かい破片の状態で出土した。口縁が接合できないため、器形がはっきりせず、型式を決定できない。

須恵器大甕は、羨道部の前庭部寄りの床面直上で出土したため、墓前に供えた状態で、崖崩れにより一気に埋まったものと考えられる。大甕に関しては、杯などに比べると出土数も少なく、時期による形態変化を捉えることが難しく、主体的に編年の材料に使用されることがないため年代の想定が難しい。口縁部下に断面を三角形とする凸帯があるものは、湖西窯群に特有の特徴であるという。後藤建一氏の編年で第Ⅳ期に相当する横枕Ⅱ遺跡において同型式の甕が出土している。

千葉県内でも、ほぼこの型式に近いと考えられる須恵器大甕の出土がみられる。まず、木更津市大久保石澄横穴4号墓出土⁶⁾のものが挙げられる。大きさは異なるが、形状・調整・口縁の整形など非常に類似している。注目したいのは形状だけでなく、出土状況である。羨道部のやや奥ではあるが、口縁を傾け立てた状態で当遺跡との出土状況に近いものである。報告者は、暗文をもつ杯との共伴を考慮し、7世紀末葉から8世紀初頭という年代を与えている。長柄町千代丸・力丸横穴群の26号横穴出土⁷⁾の須恵器大甕も類似資料である。前庭部に須恵器大甕2点の他、横瓶2点・広口長頸壺・杯・甕が1点ずつまとめて出土している。報告者は、7世紀の後半以降に比定している。こちらも、出土状況が近似している点で興味



第17図 出土遺物の類例



第18図 横穴規格 ($S = 1/160$)

深い¹⁰。成田市一鍬田甚兵衛山北遺跡¹¹（空港No.11遺跡）の大甕は、6号鉄滓集中地点からの出土である。形態は本遺跡のものと同様であるが、一回り大きく、口縁直下の貼り付け段がやや雑に作られ、内面の当て具痕が無文である点が異なる。周辺の遺物がほとんど8世紀前半の土師器杯で占められているため、大甕にもその年代が与えられている。

このように、いずれの類例も湖西産の可能性を挙げており、本遺跡ST003の造営年代も8世紀初頭を前後する時期であるとするのが妥当であろう。

2 宮谷横穴群の位置づけ（第18図）

現段階までの千葉県の横穴研究の成果をまとめておくことにする。千葉県全域の横穴を集成し、総括的に年代を与えたものとして、松本・上野氏の研究¹²（1991年）がある。横穴の出現から消滅までをⅠ期～Ⅵ期にわけて変遷を追っている。それによると、高壇式横穴がⅡ期（6世紀末～7世紀初頭）に採用され、Ⅳ期（7世紀中葉）に高壇の高さが発達する。そしてⅦ期には最終段階の簡略化した構造へと変遷し、8世紀初頭には築造されなくなっていくことを明らかにしている。一方、構造規格から横穴変遷についてアプローチしたものとして、松本氏の研究¹³がある。横穴規格に基づく基準尺度（晋尺・高麗尺・唐尺・唐小尺）を利用することによって成果を挙げている。本横穴のある東上総地域での横穴の調査例、特に高壇式横穴の資料充実を受け、高壇式横穴の変遷を描寫¹⁴で論じた。玄室袖部の無袖化と玄室床面積の減少というものが横穴形態変遷の方向性ということを明らかにできた。このことは、基準尺度で横穴の変遷を辿った松本氏の見解と一致し、この地域では、ある程度の普遍性をもつものと考えている。

以上の成果をふまえ、まず、本横穴の規格を基準尺度から検討した（第18図）ところ、ST001・ST002においては、30cm単位（唐尺）のメッシュに整合する部位が多くみられた。ST003・ST004においては25cm単位（唐小尺）メッシュに整合が多くみられ、特に立面形においてはかなりの確率で整合した。尺度による方法論にはいろいろ問題が指摘されているところではあるが、参考として、ST001・ST002とST003・ST004の築造時期の大まかなグルーピングが可能であり、前者から後者への変遷を想定しておきたい。

本横穴は、玄室平面形は□形2基、凹形2基である。□形については玄室面積減少から判断してST001→ST002、凹形に関しては同規格であることから判断して、ほぼ同時期と考えられる。玄室形態が簡略化された家形、つまり天井に樋木の名残を残すドーム形（ST003・ST004）という点を松本・上野編年のⅥ期の特徴と捉えられるなら、ST003出土の須恵器大甕の年代観と矛盾しない。立地・出土遺物の検討結果もまとめて考えると、ST001→ST002→ST003・ST004と築造されたと想定できる。玄室平面形□形がやや凹形に先行すると考えられる。まず、7世紀前半にST001の築造が行われ、最終的に8世紀初頭までST003・ST004が造営されていたと捉えておきたい。

高壇式横穴には、系譜の問題がまだ解明できていない。近年、本横穴群の周辺でも道塚横穴群¹⁵において高壇を有しない横穴の発掘が行われ、3号横穴から7世紀初頭と考えられる内外面黒色処理された土師器杯が出土している。高壇を有しない横穴が高壇式横穴に先行することは間違いないが、本横穴群とは形態的に開きが大きく、直接つながらない。今後は、この関係のあり方をどう捉えていくかを明らかにする必要がある。

- 注1 山口直人ほか 1986 「瑞穂横穴群」 勧山武都南部地区文化財センター
- 2 津田芳男・風間俊人 1998 「米溝横穴墓群」 勘縄南文化財センター
- 3 福島雅儀・横須賀倫達ほか 2000 「福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告8-弘法山古墳群-」
- 福島県教育委員会
- 4 池上 恵 1999 「日本の墳丘横穴墓」『立正大学文学部論叢』109
- 5 小林信一・黒沢 崇 1999 『県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書2-大網白里町餅木横穴群-』
勤千葉県文化財センター
- 6 通常は、片刃箭式の鉄鎌は、鎌身長の縮みに伴い、間も退化していく傾向がある。今回出土した鉄鎌も、鎌落とし前段階では、間のないものとして認識していたものである。X線写真によるとわずかではあるが逆刺の存在を確認することができた。X線写真が利用されなかった時期の実測図は、写真図版をみても鎌落としが不十分であり、その資料を使った分類編年には、注意が必要であろう。間の有無の要素のみ頼るのは危険である。鉄鎌に関しては下記の文献を参考にして記述を行った。
- 橋考古学会 1997 「特集 東国の鉄鎌」『多知波奈考古』第2号
- 7 須恵器に関しては、下記の文献を参考にして記述を行った。
- 後藤建一 1989 「静岡県の窯業遺跡」静岡県教育委員会
- 東海土器研究会 2000 「須恵器生産の出現から消滅」
- 東海土器研究会 2001 「須恵器生産の出現から消滅」補遺・論考編
- 8 関口達彦 1990 「木更津市大久保石澄横穴墓群」勤千葉県文化財センター
- 9 津田芳男・松本昌久 1991 「千代丸・力丸横穴墓群」勤長生都市文化財センター
- 10 同器種の遺物が地域の異なる横穴において同様の状況で出土しているということは、横穴における墓前祭祀の様式の存在が想定できる。
- 11 小久貴隆史ほか 1995 「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ-一鍊田甚兵衛山北遺跡(空港No.11遺跡)」勤千葉県文化財センター
- 12 松本昌久・上野恵司 1991 「千葉県内の横穴墓群」『茨城県考古学協会シンポジウム関東横穴墓遺跡検討会資料』
- 13 松本昌久 1993 「東上総における横穴墓について」『立知波奈考古』創刊号
- 14 黒沢 崇 2001 「房総における高壙式横穴の裏開-東上総地域を中心に-」『茨城大学考古学研究室20周年記念論文集 日本考古学の基礎研究』茨城大学人文学部考古学研究室
- 15 山口直人 1995 「道塚横穴・ヤグラ群」勤山武都市文化財センター



高谷横穴群周辺航空写真 (S=1/10000)



調査前遠景



調査前ST002～ST004



調査後遠景



西側尾根とST002～ST004



東側尾根とST001



ST002～ST004

ST001



全景(南西から)



左：調査前
右：溝道断面



左：調査前玄室
右：玄室内遺物出土状況



左：玄室天井
右：玄室奥壁(落書き)

図版 5

ST001

左：玄室左奥側壁
右：玄室右奥側壁



左：玄室左側壁
右：玄室右側壁



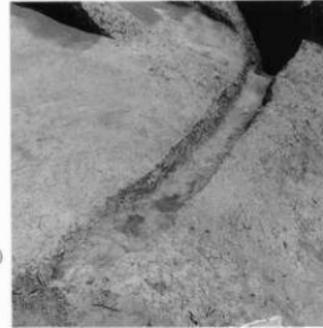
左：隔壁
右：渓道左側壁



左：前庭部左側
右：前庭部断面



左：前庭部溝(西から)



中央：右側閉塞施設



右：左側閉塞施設

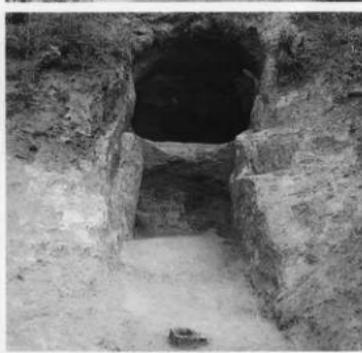
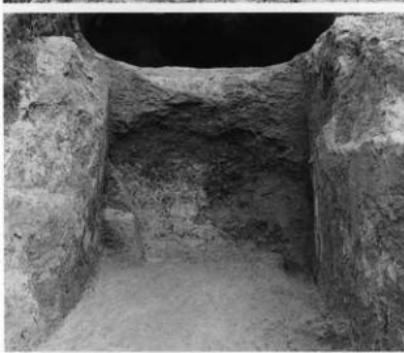
ST002



全景(南から)



左：調査前
右：羨道断面



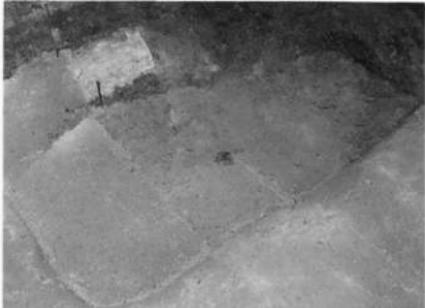
左：隔壁
右：遺物出土状況



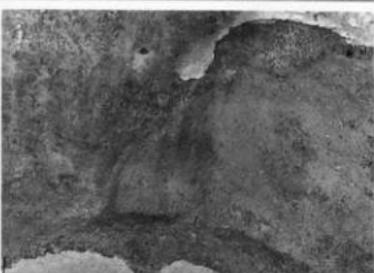
左：遺物出土状況(須恵器)
右：遺物出土状況(耳環)

ST002

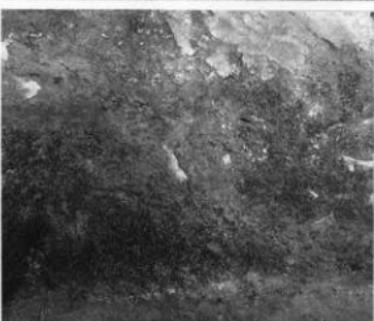
左：玄室
右：奥側棺座



左：左侧棺座
右：玄室左奥側壁



左：玄室左側壁
右：玄室右側壁



ST003



ST003



左：調査前
右：羨道～前庭部断面



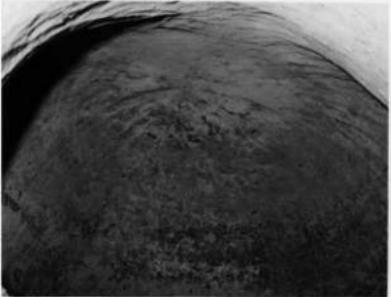
左：全景(南西から)
右：羨道入口



左：遺物出土状況
右：遺物出土状況(アップ)



左：隔壁
右：羨道(玄室から)



左：玄室天井
右：玄室天井(顶部)

ST003

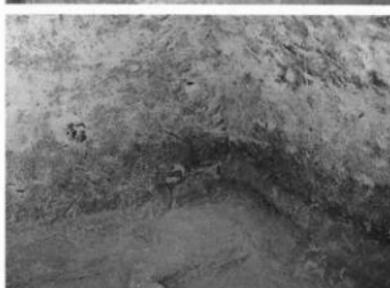
左：玄室～羨道天井
右：奥側棺座



左：左側棺座
右：右側棺座



左：玄室左奥側壁
右：玄室右奥側壁



左：玄室左前壁
右：玄室右前壁



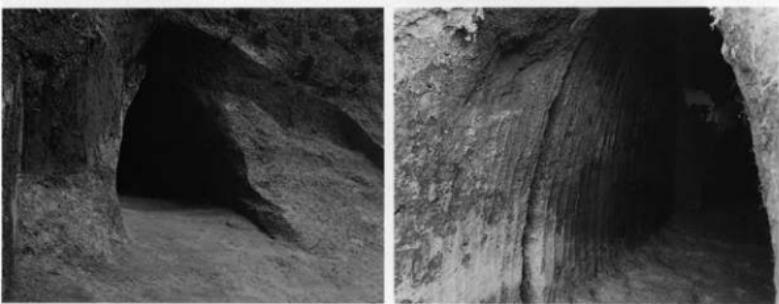
左：左側閉塞施設
中央：右側閉塞施設
右：右側閉塞施設(アップ)



ST004



左：調査前
右：羨道～前庭部断面



左：全景(南西から)
右：羨道入口



左：隔壁
右：羨道(玄室から)



羨道と玄室

ST004

左：玄室天井
右：玄室～羨道天井



左：玄室天井(頂部)
右：棺座



左：玄室左奥側壁
右：玄室右奥側壁



左：玄室左前壁
右：玄室右前壁



左：右側閉塞施設
中央：左側閉塞施設(上部)
右：左側閉塞施設(下部)



西側尾根



左：調査前全景(東から)

右：調査前全景(北東から)



左：確認トレンチ(東から)

右：確認トレンチ(西から)

東側尾根



左：調査前全景(南西から)

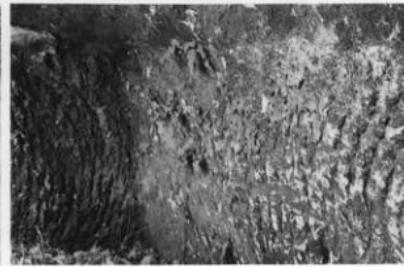
右：調査前全景(北から)



左：確認トレンチ(西から)

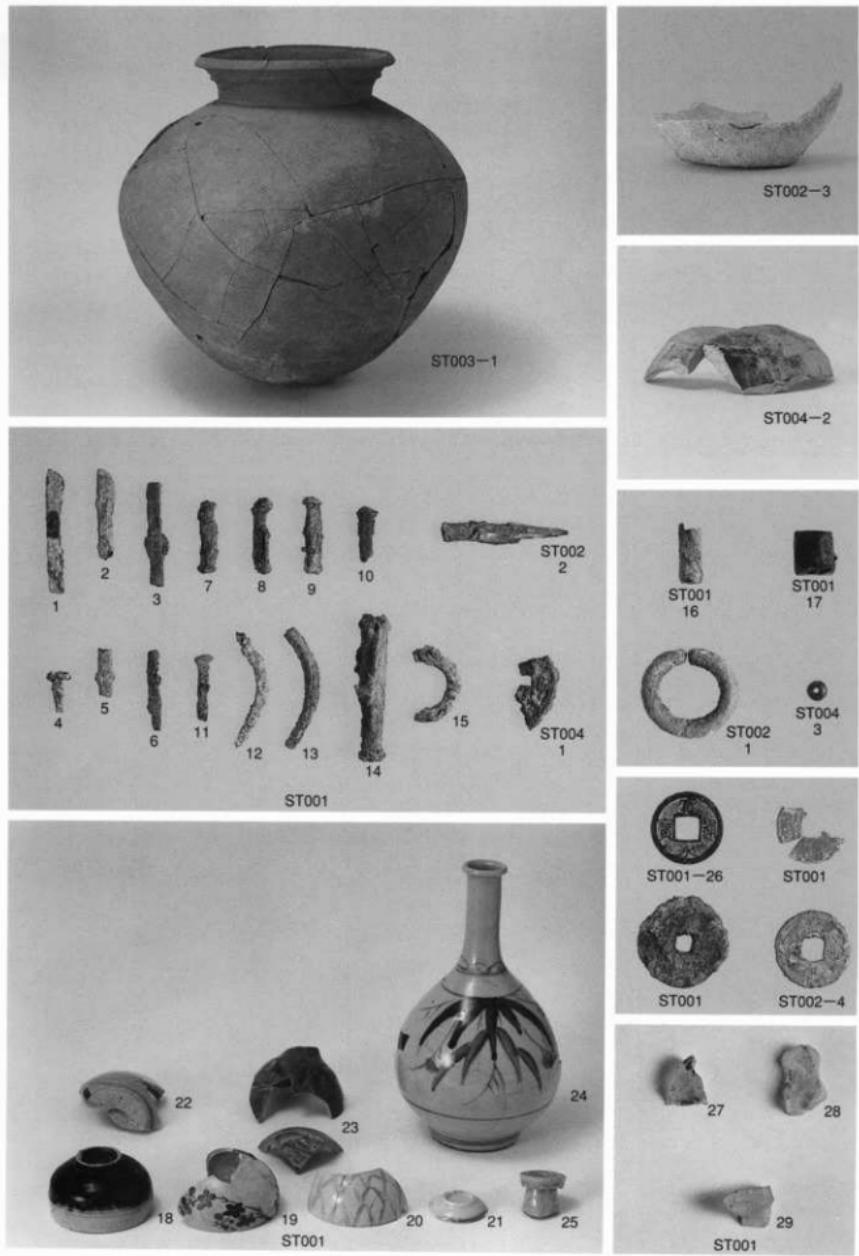
右：確認トレンチ(北から)

近現代穴



左：確認時全景(南から)

右：左奥壁工具痕



横穴出土遗物

報告書抄録

ふりがな	おおあみしらさとまち みやざくよこあなぐん							
書名	大網白里町 宮谷横穴群							
副書名	地方特定道路整備埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第432集							
編著者名	黒沢 崇							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL043-422-8811							
発行	西暦2002年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号			
宮谷横穴群	千葉県山武郡 大網白里町 大網字西宮谷 2989	12402	006	35度 31分 47秒	140度 19分 7秒	2000.5.15 ~7.31	横穴4基 400 m ²	地方特定道路整備に 伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
宮谷横穴群	横穴	古墳時代 終末期	横穴4基 墳丘状部分2か所	古墳時代 近世	土師器、須恵器、鉄器、 両頭飾鏡、耳環、 ガラス玉、コハク玉 陶磁器、古鏡		天井部の崩落の少ない高 壇式横穴を検出した。高 壇式の構造を考える上 で、貴重な資料である。	

千葉県文化財センター調査報告第432集

大網白里町 宮谷横穴群

——地方特定道路整備埋蔵文化財調査報告書——

平成14年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県土木部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 ライフ
成田市東和田595